

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

仏教に於ける平等の研究

河 野 真 成

ダルマ即ち法は仏教の中心概念であることは明確である。そして中心概念であるため法の解釈が多義に分れ、混乱しその内容が曖昧となつてゐる。この事は当然仏陀の教も曖昧にしか理解し得ない事になる。なぜなら中心を理解することが出来ないのどうしてそれを理解することが出来るであらうか。故に仏教を把握するには中心である法の意味を再認識する必要があると考へた。

そこでこの研究に於いては、法の解釈が多義に分れ混乱した原因を探究し、その問題の解決を大般若波羅密多經の法性品及び平等によつて試みたのである。

法の科学的な解釈は、言語学的観点、あるいは哲学的観点から西洋の学者によつてなされた。しかし彼等は仏教が無の立場にあるのに有の立場から（例えば法を有自性的に見ている）あるいは認識論の立場に仏陀は立つて法を解釈したのに形而上学の立場から（例えば法を形而上学の最高原理と見ている）それを解釈していた所に仏教の法を正しく理解することが出来なかつた原因があると思われる。

以上のような仏陀の立場と異なる見地からのダルマの定義は仏教の中心概念としての意義を明らかにすることは出来ない。即ち仏陀の心を知らずして經典の意味を正しく理解することは出来ないだろう。故に經典の意味を正しく理解するには仏陀の心を我々が持たせてもらうより他に道はない。そして仏陀の心を持たせてもらうには自己の持つているものを全部すて自己自らが帰依しなければならぬ。このことは有を捨て無に依るということであ

あり、これによつて仏陀の心を持たせてもらえるのである。

この仏陀の心によつて法性品をみるに、そこで問題とされていることは法の本質についてである。そしてそれは次の様に説かれている。

法の本質は、いかなる原因によつて出来て来たのかという問題に対し、それは超越的であり認識することが出来ないとしている。しかし法の本質はいかなるものであるかは勝れた智慧を持つ事によつて認識することが出来る。この法の本質を認識することによつて迷いを脱し悟ることが出来る。そして認識される本質は本来因果に従きない清浄な本質であるから仏法の根源であるという。故に清浄なる本質を認識することによつて仏教の本質を認識することが出来るわけになる。それでは諸法の根源である清浄なる本質はいかなる性を有するのであろうか。これについては自性というものは本来ないとするのである。なぜなら根源には根源がないから無自性なのである。このように無自性であるから執着することなく自由自在な働きが出来る。この自由自在な働きの出来る無自性で清

淨なる本質とは、いかなるものだろうか。それは勝れた智慧によつて認識することが出来る。そしてその智慧によつて見るに、無自性で清淨なる本質とは平等であると法性品では説いている。

次に平等品で問題としていることは、法の本質である平等とはどうゆうことがあるいほどういう状態を平等というかということであり、それは次の様に説かれている。

平等とは彼此がないということであり、有無がないという事である。そしてこれが眞実の本質である。この二つの異つたものがないということが寂靜ということであり平等と寂靜は同義に使われている。また我々は差別見を持つてゐるため平等を認識することが出来ない、ところが勝れた智慧を持つことによつて差別見を捨てること出来る。故に平等と捨は同義に使われている。さらに法の本質である平等を正しく見ることによつて平等を認識することが出来る。故に平等と正見は同義に使われている。

以上の様に平等は眞実の本質、法の本質、仏教の根源であり、また寂靜、捨、正見という仏教の重要概念とも

密接な關係にある事が了解される。故にこれからは、さらに平等を精微に研究する必要がある。

「菩薩思想の研究」

真 田 康 道

菩薩思想の研究を卒論のテーマとした理由については既に論文の序論に於いて述べたのであるが、それは大乘菩薩思想の興起にともなつて大乘仏教がどのように展開し、發達していったかということ、いいかえれば大乘菩薩思想より、大乘仏教というものを私なりに理解し把握せんとするためであつた。大乘經典は紀元一―二〇頃一応成立したと考えられるが、これらの經典を編纂した人々が何を考え、何を主張せんとしたかをつかみとることにより、もつと我々に身近なものとして、生きたものとして理解しようと試みたいと考えたからである。従つて私は大乘菩薩思想の起源的方向より考察せんと、次の三つの章に分け、論述せんとした。即ち第一章「菩薩の起